

過労死防止学会 第5回大会(龍谷大学深草 C 2019年5月25日)

特別シンポジウム 「働き方改革」 関連法制定1年、各分野から成果と課題を問う

【司会：黒田兼一】

私はこの特別シンポジウムの前半の司会をします、元明治大学の教員の黒田兼一と申します。どうぞよろしく申し上げます。

最初に、今回の大会会場でお世話になります龍谷大学学長の入澤崇様からご挨拶をお願いいたします。

【龍谷大学学長 入澤 崇さん】

龍谷大学の学長の入澤と申します。本日は大変暑い中、足を運び下さいまして本当にありがとうございます。この学会、この会場、この龍谷大学を使っていただきましたこと、本当に光栄に思います。

龍谷大学は1639年に西本願寺の境内に設立されました僧侶養成学校である教育施設「学寮」がその出発点で、本年、創立380周年を迎えたところでございます。

先日、東京に出張で赴いたときに少し時間がありましたものですから、東京駅の斜め前にあります三菱の美術館に行きました。ラファエロ前派の特集をしており、その中にラスキンという方、明治時代の夏目漱石に影響を与えた文芸批評家ですが、その人のスケッチが展示されておりました。ラスキンという人は建築学に大変造詣が深く、ゴシック建築の論評もしていますが、その建築の様式や建築の美というようなどころよりも、それを建てた労働者に目を向けた批評家として知られています。

どこにまなざしを向けるか。今、働き方改革ということで、私たちの働き方ということに対してまなざしが向けられていますが、私も私立大学の理事の一人として理事会に出て、そこで政府からの働き方改革概要というものを知らされたこともありました。けれども、果たしてこれが改善に向かうのかどうかというところに大変に疑問に思っております。

先ほど申し上げました通り、龍谷大学は創立380周年を向かえたわけではありますが、この周年事業の基本コンセプトとして、私は「自省利他」ということを掲げました。自ら省み、他を利する。個人としても自らのありよう、自らの行き方を省みる。そして私どもが所属している組織のありようを省みる。まさに私たちの働き方、生き方を省みる。そして自己中心的な、自己利益ばかりを追求するようなことが様々な問題を引き起こしている。そこに焦点を当てて、仏教の精神であります、他者を利すると、利他の精神をもって、この周年事業を、その「自省利他」という哲学を世界に向けて発信しようということにしております。

本日は暑い中、本当に皆様が叡智を結集して、過労死防止ということについて議論をしていただくということは、大変尊いことと存じ上げております。

皆様の過労死防止について実りある議論を期待して、冒頭の挨拶とさせていただきます。本日は本当にありがとうございます。

【司会：黒田兼一】

それでは、特別シンポジウムを始めます。

大変残念ですが、この会の「看板」であり、過労死問題ではずっと尽力されてきました森岡孝二先生が昨年の北海道・札幌での大会以降、体調を崩され、昨年8月に急逝されてしまいました。森岡先生は身体

を張って、労働時間がなかなか短くならない中、この国の法律についてしっかりとしたものを作るべきだという主張をされてきました。家族の会の方、私たち学会、弁護士、いろんな方々が批判的な意見を述べましたが、国会はそのことについてほとんど耳を貸すことをなく、「働き方改革関連法」という法律が昨年6月末に国会で通ってしまいました。

この法律の評価に関しては、正規と非正規の格差が縮まるから良いのではないかという意見、あるいは労働時間についても一定の限度があるからいいという意見もありますが、しかし、内容を振り返ってみると、必ずしもそうなっていない部分もあるかとは思いますが。これには、再び私たちがこの問題について、きちっと捉えなおし、この学会の基本である労働時間を適切なものにして、働き過ぎで亡くなるという非人間的なことが無いように、そういう労働慣行をどう築いていくのかということ、それはまさしくこれからの私たちの仕事でもあり、また、当学会の課された仕事であろうと自覚しております。

本日の特別シンポジウムは、そういう問題に向けて、まずはオープニングとして、家族の会の方から、この法案に関する、あるいはまた長時間労働に関するご自身の体験と今後の課題ということで、西垣迪世さんにお話をいただきます。

二人目は、この問題に対しマスコミ関係が注目し、各紙、各ジャーナリズムが報道してくれています。その中のお一人、朝日新聞の阪本輝昭さんに、報道という視点からお話をさせていただきます。

三人目は、労働法の専門家であり、また近年は韓国での働き方についていろいろ研究されています脇田先生からお話をいただきます。

話される内容は盛りだくさんですが、時間は限られています。長時間労働を削減するというのが私たちの学会の目的ですので、時間は守ってもらうことを前提に、お一人35分ということでお話をいただき、10分間の休憩を挟んで、1時間の議論ということになっております。

後半は松丸先生に司会をお願いしています。それでは、よろしくお願いします。

(反訳：笠井弘子、編集：高田好章)